

土田・廻間遺跡

調査は環状2号線建設に伴う事前調査として、昭和60年4月より61年2月まで10ヶ月間実施した。調査総面積は13,738㎡である。調査の結果、名鉄本線をはさんだ東側の土田60A・B区及び松の木60A～D区は、同一の微高地上に展開する同一の遺跡と認定した。したがって松ノ木60A～D区、土田60A・B区を「廻間遺跡」、旧谷地形をはさんで西側に隣接する土田60C・D区以西を「土田遺跡」と呼称することとする。

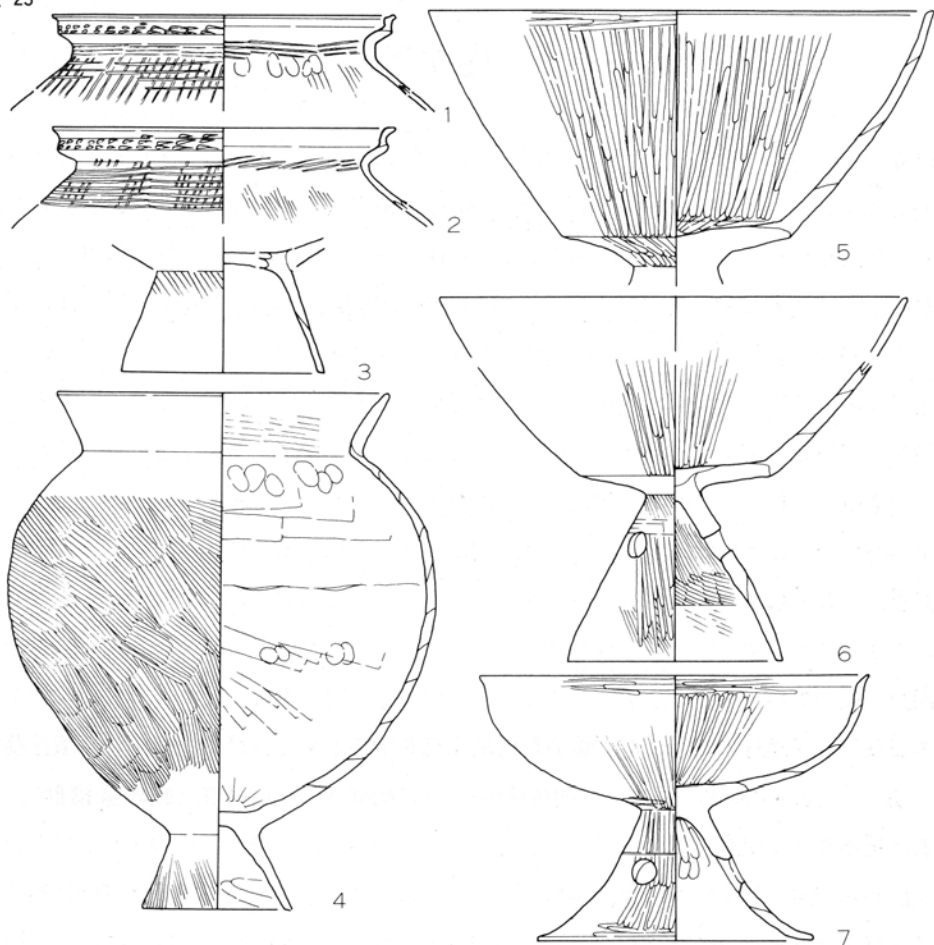
土田遺跡及び廻間遺跡は、愛知県西春日井郡清洲町大字土田・廻間に所在する、古墳時代初頭～清洲城下町時代にかけての複合遺跡である。土田・廻間地区は清洲町の西部に位置し、遺跡は五条川の自然堤防西端とその後背湿地に展開している。

本遺跡の周辺には自然流路をはさんで北側に隣接する松ノ木遺跡（弥生中期～）がある。廻間遺跡はこの松ノ木遺跡や、西隣の土田遺跡が所在する南北にのびるそれぞれの微高地の、まさに“ハザマ”として位置している。

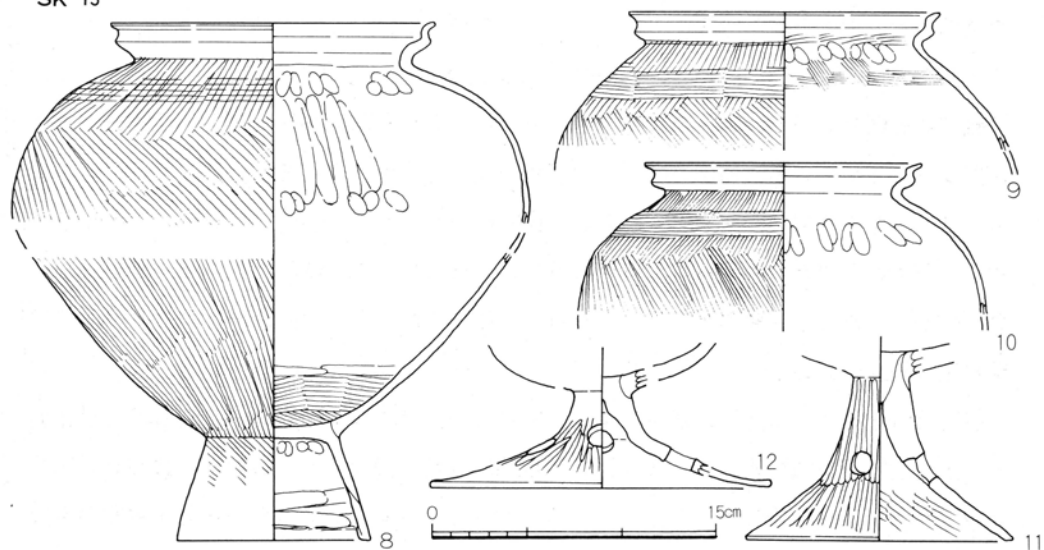
調査区域内で検出された遺構は大きく5群に別れる。西側から中世の方形土壇群（土田遺跡22基、廻間遺跡44基）、前方後方形低墳丘墓を中心とする古墳時代初頭の低墳丘墓群（5基）、これと同時期と思われる畑の畝のように配列された遺構群（畝状遺構群）、この低墳丘墓群と畝状遺構群に係る集落と思われる方形竪穴住居群（73基）、そして調査区の北西から南東へ貫く自然流路が検出された。このうち調査区域東側の自然流路は幅約15mで、集落が営まれる時期以前からの堆積が認められる。多数検出した住居跡は、規模が4種類に大別できる。全体的に隅丸方形を呈しているが、6m前後のほぼ正方形のもの、5m前後のほぼ正方形のもの、長軸が約5.5m、短軸が4m前後のもの、長軸が4.5m弱、短軸が4m弱のものが認められる。掘形の内側にはそれぞれ幅約30cm、深さ約20cmの周溝が掘り巡らされている。貼床の四隅には径約30cmの柱穴が掘られている。これらの住居については一定の時期に同一規模が作られた傾向は認められず、各時期にそれぞれの規模が併存したものと思われる。各住居跡は複雑に切り合っており、低湿地ゆえか住居自体の寿命が短かったことを窺わせる。それぞれの規模、方向などによる住居の性格については、現在整理検討中である。

住居跡の埋土からは土器が多量に出土しているが、その多くは廃棄されたものと思われる。出土遺物の器種構成としては高杯、S字状口縁台付甕が多く、広口壺（含パレススタイル）、器台、長頸壺なども伴出している。これらはいずれも欠山期から元屋敷期のものと思われるが、この時期を細分し得る資料として極めて重要である。（松田 訓）

SK 23



SK 13



廻間遺跡出土土器 1 : 4

調査区位置図及び遺構配置図(二〇〇〇分の一)

